

# 日本感情心理学会第22回大会シンポジウム1「いじめと文化」

## いじめと文化的心性との交点

一言英文

(関西学院大学)

この講演では、互いに交絡するいじめの普遍的側面と文化的側面に焦点を当て、現代とこれからの日本社会において重要となる社会・文化的観点について、感情心理学、社会心理学と比較文化心理学の研究と諸概念を引き合いに論考する。

いじめは、国や年齢を超えて偏在する、社会的勢力や社会的比較に関連した感情と社会心理の問題と捉えることができる。例えば澤田(2006)による「妬み」の研究では、いじめの加害者に「悪性妬み(malicious envy)」の過敏性があることに着目し、シナリオによる実験的操作や他者評定を基準とした検討により、いじめに社会的比較感情の問題が潜在することや、それらがいじめ行動の背後にあることを示した。Keltnerら(1998)は、「社会的勢力(social power)」の違いが否定的な「からかい(teasing)」に繋がることを示しており、Piffら(2009)は、高い社会階層に代表されるコントロール感や欲望に対する肯定的態度が「自己中心主義(solipsism)」に繋がるとし、プライミングを用いた非倫理的行動の研究を行なっている。

いじめに底流するこれらの感情心理学・社会心理学的要因は、さらに文化的文脈に埋め込んだ理解が必要である。たとえば、社会的比較の対象者や比較内容、対処行動は文化によって異なり(高田, 2011)、日本の学生では特に自分が「人並み」でないことに「恥」を感じる(永房, 2002)。森田・清水(1994)による「いじめの四層構造」の研究では、欧州圏に比べ日本では中学生の時期にいじめを仲裁する者が減少し、傍観する者が増加する特徴がある。日本では社会的勢力の強い者ほど「怒り」を表出し(Kitayama, under review)、関係からの排除の危険と隣り合った対人関係を保ち(Kashima & Hitokoto, 2009)、他者に迷惑をかけまいと関係懸念(relational concern; Taylorら, 2004)により援助要請を抑制し、調和を保つため否定的な感情を抑制することがあり(Murata, Moser, & Kitayama, 2012)、これらは日本のいじめ問題において考慮する価値のある文化的要因である。

また、過去半世紀にわたる日本の急速な個人主義化によって、若者や異文化経験者を先駆けとして権力格差(Hofstede, 2001)に関する価値観のずれ違い(Kawakami & Glazer, 2011)が生じている可能性、いじめに対する心理的反応自体が文化によって異なる可能性(Lohら, 2010)、および、対人関係の調和に変容が見られる可能性(Hitokoto, under review)についても論考する。